

〈原 著〉

運動部活動の充実に向けて校長が重要視している取り組みの探索

—中学校校長へのインタビュー調査に基づく質的研究—

山田 稔¹⁾²⁾³⁾・山田 快⁴⁾・川田裕次郎¹⁾²⁾・長登 健¹⁾²⁾Exploration of School Headmaster's Practices for Facilitating Athletic Club Activities:
A Qualitative Study Based on the Interview for Junior High School HeadmastersMinoru YAMADA¹⁾²⁾³⁾, Kai YAMADA⁴⁾, Yujiro KAWATA¹⁾²⁾
and Takeshi NAGATO¹⁾²⁾

Abstract

This study aimed to examine how school headmasters manage and activate athletic clubs. Five junior high school headmasters were interviewed. Responses were qualitatively analyzed with the KJ method. First, “cultivation of students’ autonomy,” “enhancing motivation for sport participation,” “system of transferring to a different clubs,” “creating atmosphere of full participation,” “setting activity goals,” “encouraging club participation,” “creating relationships to others,” “maturing as a person,” “observing rules and manners,” and “encouraging greetings”) was extracted. Second, “correspondence with government policies” (“interaction with community,” “utilization of support from education board,” “understanding community sports clubs,” relationship with guardians and community,” and “encouraging attribution of community”) was extracted. Third, “reduction of teachers’ burden” (“personal allocation considering individual requirements,” “personal allocation considering individual experience,” “respect to teacher’s action policy in an athletic club,” “understanding teachers’ burden,” and “understanding problems teachers face”) was extracted. The three school headmaster’ initiatives are interrelated. It is seemed that school headmasters strongly believe that achievements of both “correspondence with government policies” and “reduction of teachers’ burden” provide “cultivation of students’ autonomy.”

Key words: school headmaster, athletic club activity, facilitation, qualitative analysis

1. 緒 言

2002年の中央教育審議会（以後、中教審と表記する）答申⁶⁾の中で「運動部活動は子どもの体力向上に有効であることに加え子どもの自主性や協調性、克己心、フェアプレーの精神を育むなど教育的効果も大きく、より多くの児童生徒が自ら意欲的に興味・関心のあるスポーツに取り組めるよう充実を図る必要がある」と明記されている。我が国の運動部活動の歴史は、明治前半期に東京の高等教育機関で

-
- 1) 順天堂大学スポーツ健康科学部
School of Health and Sport Science, Juntendo University
 - 2) 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科
Graduate School of Health and Sport Science, Juntendo University
 - 3) 玉川大学教師教育リサーチセンター
Teacher Education Research Center, Tamagawa University
 - 4) 法政大学経済学部
Faculty of Economics, Hosei University

誕生し大正・昭和初期までに全国の中等教育機関に普及した¹⁷⁾。それ以来、世界に例を見ない独特のスポーツ教育システムとして日本人のスポーツ観を形成し、スポーツ文化の根幹に位置付いている。

2008年の中教審答申⁷⁾では、学校教育活動を「教育課程内の学校教育活動」と「教育課程外の学校教育活動」に大別し、部活動は「教育課程外の学校教育活動」の1つであるとされた。さらに現行の学習指導要領⁸⁾においても、部活動は「学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること」と言及されており、教員は課外活動である部活動の指導に努めることが求められている。

全国の公立中学校校長が加盟している全日本中学校長会においては「運動部活動の意義の再認識」「部活動の適正な運営」「教員の超過勤務への対応」「部活動のあり方の検討」が学校運営上の課題として論議されている¹⁹⁾。一方、日本中学校体育連盟加盟校・加盟生徒数調査¹⁴⁾によると、運動部活動の数は減少し生徒自身が好きな運動部を選びたくとも選べない状況が増えてきている。また、運動部活動の展開に欠くことのできない保護者からの支援は、顧問教員の部活動へのコミットメントの強さと関連することが報告され¹⁵⁾、部の活動に関する保護者の理解は容易に得られない現状があると言える。さらに、保健体育以外で担当する運動部の種目を経験したことのない教員は約半数に上り¹³⁾、生徒の技術力や精神力を十分に向上させることができないといった課題も散見される。

こうした課題を踏まえて、「校務をつかさどり、

所属職員を監督する¹⁾立場にある校長は運動部活動を管理・運営する最高責任者の役割を担っており、運動部活動の充実に向けて様々な取り組みをしてきている。しかしながら、これまで運動部活動に関する実態調査を通じて、運動部活動をめぐる教員の課題や取り組みに関する報告はあるものの¹²⁾、運動部活動の管理・運営を担う校長の取り組みについて明らかにした研究は見られない。

そこで本研究では、運動部活動の充実に向けて校長の具体的な取り組みを明らかにすることを目的とする。

2. 方 法

2.1 対象者

関東圏の公立中学校に勤務する校長5名を対象にインタビュー調査を行った(表1)。対象の中学校は都市部に位置している学校3校、地方部に位置している学校2校である。生徒数・学級数は179名・6学級の小規模校から738名・21学級の比較的大規模校まで多様性を持たせた。

2.2 手続き

本研究は順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科研究等倫理審査委員会の承認を受けて実施した(承認番号:院28-5)。

2.3 調査内容

(1) 対象者の属性と勤務校の特徴

対象者の属性として、年齢、性別、教員歴、校長歴、行政経験の有無(年数)について質問した。勤務校の特徴として、生徒数、学級数、教員数を質問

表1 対象者の属性と勤務校の特徴

対象者	年齢(歳)	性別	教員歴(年)	校長歴(年)	赴任校校長歴(年)	行政経験(年)	生徒数(名)	学級数(学級)	教員数(名)
1	57	男	34	5	2	9	179	6	18
2	52	男	30	1	1	5	300	10	22
3	56	男	33	3	1	7	731	20	41
4	58	男	36	2	2	無	453	12	25
5	60	女	38	4	4	1	738	21	38

備考:行政経験は教員歴の内数

教員数は臨時的任用教員を含めた常勤の教員数

した。

(2) 運動部活動を充実させる上で重要視している 取り組み

各対象者に運動部の活動を充実させる上で、どのようなことを重要視し、どのような取り組みをしているかについて回答を求めた。

2.4 集計方法

インタビュー調査の集計方法は、アフターコードによる量的分析、グラウンデッド・セオリー・アプローチなどもあるが、本研究では、志賀¹⁶⁾を参考にKJ法³⁾⁴⁾を応用して集計を行った。校長からの回答を抽象化せず、回答内容に沿って整理することが本研究の目的に最も合致すると考えたからである。

具体的には、インタビュー調査で得られた全ての回答について文字起こしを行い(逐語録の作成)、回答内容を適切な長さに断片化し、断片化した個別の回答を整理・集約した。内容が曖昧または理解が不可能であった回答は除外した。集計作業は、筆頭著者を中心として、スポーツ心理学及びスポーツ教育学に精通する3名の大学教員を加えた計4名で行った。

3. 結 果

3.1 対象者の属性と勤務校の特徴

対象者の属性と勤務校の特長は表1のとおりである。年齢は50代が4名、60代が1名。教員歴はいずれも30年以上。校長歴は1年から5年まで。行政経験のない方は1人だけであり、他はすべて1年以上の行政経験を有していた。前述したとおり、生徒数・学級数は179名・6学級から734名・21学級であり、教員数も18名から41名と多様であった。

3.2 切片の集約

断片化した個別の回答は1回答ごとに切片(カード)に記載された。切片数は94片だった。94片について、前述した4名の研究者が回答者の意図するところを吟味し、その内容が類似していると判断されたものを集約したところ、21の小グループにまとめられた。21の小グループに小表札をつけ、さらに内容の類似するものを集約したところ、6つの中グ

ループにまとめられた。6つの中グループに中表札をつけ、さらに内容の類似するものを集約したところ、1つの中グループが独立的、残りの5つのグループが2つの大グループにまとめられた。結果を図解したのが図1である。なお、図1では各切片の記載内容を簡略化して表現している。各切片の具体的な記載内容については付表1から付表3にまとめている。

21の小グループのうち5グループ(「参加意欲を高める工夫」「転部や兼部ができる仕組み」「全員が部活動に参加する雰囲気作り」「活動目標の明確化」「入部の推奨」)が「運動部活動を促進するための仕組み作り」という中グループに、4グループ(「人間関係の構築」「人間としての成長」「マナーやルールの順守」「挨拶の推奨」)が「社会性の育成」としてまとめられ、この2つの中グループが「生徒の自主性を尊重する取り組み」という大グループにまとめられた。

21の小グループのうち5グループ(「地域との交流」「教育委員会の支援の活用」「地域のスポーツクラブの把握」「保護者や地域との連携」「地元への帰属意識を高める工夫」)が「協働するための仕組み作り」という中グループとしてまとめられた。このグループは他の中グループとは類似するところがなかったので独立のグループとして位置づけられたが、その意味するところを検討し、大表札を「行政施策を達成する取り組み」とした。

21グループのうち3グループ(「教員の希望した部への人員配置」「教員の経験と担当種目の一致を目指した人員配置」「顧問の活動方針の尊重」)は「顧問のモチベーションを維持・向上させるための工夫」という中グループに、2グループ(「教員の負担の認識」「顧問の抱える課題の認識」)が「顧問への配慮」という中グループに、2グループ(「全員顧問制及び複数顧問制」「保護者との連携」)が「支援者の確保」という中グループにまとめられ、この3つの中グループが「教員の負担軽減への取り組み」という大グループにまとめられた。

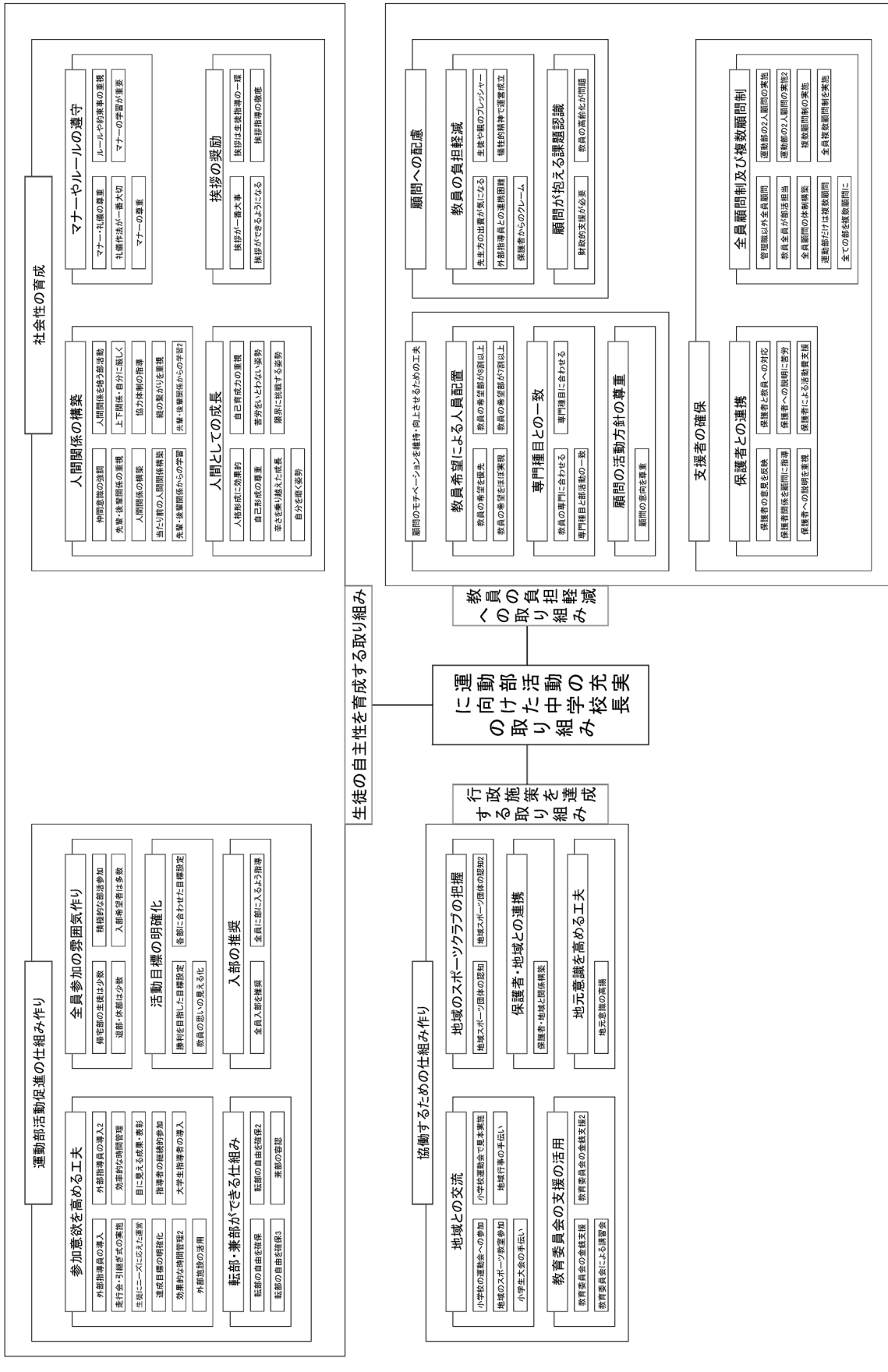


図1 インタビュー内容のまとめ

4. 考 察

本研究では、運動部活動の充実に向けて、校長がどのような取り組みを重要視して運動部活動の管理・運営を行なっているかを明らかにすることを目的とした。その結果、対象となった中学校校長が運動部活動の充実に向けて常に意識しているのは、「生徒の自主性を育成する取り組み」「行政施策を達成する取り組み」「教員の負担軽減を図る取り組み」の3つの取り組みであることが明らかとなった。

「生徒の自主性を育成する取り組み」では、「生徒の技能向上のための外部指導者の導入やレベルに応じた目標設定」(付表1)などの「運動部活動を促進するための仕組み作り」などを通して、生徒が主体的、積極的に運動部活動へ参加できるような環境整備に向けて校長が努力している姿が浮き彫りにされた。

また、「協力的な人間関係や相互信頼、人格形成、挨拶やマナー教育」(付表1)のような「社会性の育成」も重要な取り組みであり、子ども達が運動部活動を体験する中で得られる、規範意識や挨拶や礼儀等の社会性の育成を通して、生徒の自主性を育むようにも努めている。

以上から、校長は生徒が運動部活動において部員との関わり合い、競い合い、助け合いを経験することを通して、生徒の自主性を育むことを目指していることが示唆された。現在施行されている学習指導要領⁹⁾には、運動部活動は「生徒の自主的、自発的な参加」に基づき、学習意欲の向上や責任感、連帯感を涵養することに貢献するものであると明記されている。また、中澤¹¹⁾は、戦後の学校教育において子どもの自主性が価値あるものとして認められ、その自主性を育むための手段にスポーツを介した運動部活動が活用されてきたと論じている。本研究の結果として示された「生徒の自主性を育成する取り組み」は、校長が戦後の学校教育の中心的価値である民主教育を実現する取り組みを強く意識していること、学習指導要領の方針や学校教育の変遷を踏まえながら対応していることを意味するものと理解でき

よう。

「行政施策を達成する取り組み」では、「地域行事への参画、部活運営の講習会への参加、保護者や地域社会との連絡調整」(付表2)など、「協働するための仕組み作り」への取り組みがなされ、校長は地域と連携を図ることに努めていることが確認できた。校長は学校に身近な関係である、地元の小学校や地域スポーツクラブ、教育委員会や保護者との関係構築が重要と認識しているようである。2012年に施行されたスポーツ基本計画⁹⁾では、「地域のスポーツ指導者の確保」「複数校合同運動部活動」「総合型地域スポーツクラブとの連携・融合の推進」¹⁸⁾といった取り組みが学校に求められるようになっていく。校長は、こうした行政施策を達成することが学校に求められていることをうまく活用して地域、教育委員会、保護者との連携を図り運動部の充実を図ろうとしていると思われる。これらはいわゆる学社連携の好循環づくりにつながるものであり、学校教育とスポーツが直面する現在の社会的課題に対応するものと理解できよう。

最後に、「教員の負担軽減を図る取り組み」では、「部活担当は教員の希望を優先することや、校長が外部指導員と顧問の間に入って調整する、校長が保護者への対応をする」(付表3)など、「顧問のモチベーションを維持・向上させるための工夫」「顧問への配慮」「支援者の確保」などの取り組みがなされており、校長は教員に対して可能な支援や助言を行っていることが明らかとなった。我が国の教員の1週間当たりの勤務時間は34の参加国中で最も長く(日本:53.9時間、参加国平均:38.3時間)、課外活動(スポーツ・文化活動)の指導に費やす時間が著しく長い(日本:7.7時間、参加国平均:2.1時間)ことが報告されている⁹⁾。また、中学校では「実技指導をしない教員が担当している運動部」が13.7%存在し¹³⁾、運動部を教員のみで指導するには限界があるため、地域のスポーツ指導員の導入などが進められているものの、「指導方針の不一致」や「謝礼金の不足」といった課題があることも指摘されている²⁾。校長は、こうした背景を考慮して、各

教員の専門性や意向を尊重した体制づくりや外部指導員と顧問の先生の間に入り調整をしたり、複数の教員で部の指導に当たることや保護者からの協力を得ることで、運動部を指導する特定の顧問に負担が集中しないための対策を講じるなど、顧問の慢性的な負担を軽減するためのサポートに努めていた。これらは、教員の過重負担は教員をとりまく現在の重要な教育問題のひとつであり、運動部活動の充実にとっても大きな課題であることを示している。

また、得られた「生徒の自主性を育成する取り組み」「行政施策を達成する取り組み」「教員の負担軽減を図る取り組み」の3つグループは、相互に関連して運動部活動の充実に貢献しているようである。

例えば、外部指導員の導入(付表1)は直接的には生徒のやる気を高め、「生徒の自主性を育成する取り組み」であるが、地域社会の人材を活用するという点では「行政施策を達成する取り組み」であり、外部指導員と顧問との調整の問題があるものの「教員の負担軽減を図る取り組み」でもあり得る。同時に、切片数を比較すると「生徒の自主性を育成する取り組み」が94片中50片と50%以上を占めていることから、校長は生徒の自主性育成が校長の取り組みの最も重要な要素として位置づけていると考えられる。

このことから、校長は教育委員会、保護者、地域の資源を学校に取り入れる努力を積極的に行い、教員のサポートを行うことを通して、生徒の自主性を育み、運動部活動の充実を目指していること、運動部の充実に向けて学校を取り巻く資源を効果的に結びつける役割を遂行しようと心がけていることが明らかになった。

以上を踏まえて今後の展開を考えれば、運動部活動の活性化を図る際、校長は管理職として、部の指導に当たる顧問に対する支援者をいかに確保し、顧問のサポート体制を構築していくかが重要になると思われる。今後は、2015年の中教審答申¹⁰⁾にもあるように、運動部活動の指導や試合の引率などを単独で行うことのできる部活動指導員(仮称)を新たに導入することをはじめ、運動部活動の充実に必要な

顧問の人事配置、地域や保護者の理解と協力を得ることができるような学校、教育委員会、保護者、地域の連携の更なる強化などの取り組みが必要になるものと思われる。

5. 結 論

運動部活動の充実に向けて校長が重視しているのは「生徒の自主性を育成する取り組み」「行政施策を達成する取り組み」「教員の負担軽減を図る取り組み」の3つであることが明らかとなった。

「生徒の自主性を育成する取り組み」は、校長が戦後の学校教育の中心的価値である民主教育を実現する取り組みを強く意識し、学習指導要領の方針や学校教育の変遷を踏まえながら対応していることを意味するものと解釈できる。「行政施策を達成する取り組み」は学社連携という大きな社会的課題への対応を意識し、行政施策を活用して運動部活動の充実を図っているものとみられる。「教員の負担軽減を図る取り組み」は運動部だけでなく、教員の過重負担が大きな問題となっており、現在の教育課題に直結する取り組みといえよう。

これらの取り組みは相互に関連するものであるが、切片の50%以上を占めているのが「生徒の自主性を育成する取り組み」であることから、校長には「行政施策の達成」と「教員の負担軽減」はともに「生徒の自主性の育成」に結び付くことによって運動部活動の充実が展開されるという意識が強いものとみることができる。

6. 今後の課題

校長は運動部の充実に向けて、生徒の自主性育成を念頭に置きながら、学校を取り巻く資源を効果的に結びつける役割を遂行しようと心がけていることが明らかになった。本研究の成果を踏まえて今後の展開を考えれば、運動部活動の活性化を図る際、校長は管理職として、部の指導に当たる顧問に対する支援者をいかに確保し、顧問のサポート体制を構築していくかが重要になると思われる。

研究上の課題としては校長へのインタビューの質

量的な向上があげられる。校長にインタビュー調査を実施することは極めて難しい。多くの校長が多様な業務に追われ、また学校内部の情報を外部に提供することに関して、非常に気を遣う立場でもある。従って、本研究では対象者の性別、校長歴や行政経験の有無といった校長の属性や対象校における運動部活動の歴史の変遷、また対象校の運動部活動推進に携わった歴代の校長の意向などについても詳細に検討を行うことができなかった。そのため、本研究から得られた結果は、現校長の実践に着目した横断研究に留まったことを記しておきたい。今後は、校長がスポーツに内在する価値について理解を深め、多くの学校が運動部活動を充実させる上で援用することのできる汎用的な知見を見つけ出す必要がある。

文 献

- 1) 学校教育法(1947)第37条4,「校長は、校務をつかさどり、所属職員を監督する」。
- 2) 神谷 拓(2015)運動部活動の教育学入門～歴史とのダイアログ～。外部指導者制度の現実。第1刷,東京,大修館書店,228-234。
- 3) 川喜田次郎(1967)発想法。中央公論社。
- 4) 川喜田次郎(1970)続・発想法。中央公論社。
- 5) 国立教育政策研究所(2013)国際教員指導環境調査要約(TALIS2013)。教員の仕事の時間配分,22-24。
- 6) 文部科学省(2002)中央教育審議会答申。Ⅲ)子どもの体力向上のための総合的な方策について。4)学校の取組の充実。(2)運動部活動の充実。
- 7) 文部科学省(2008)中央教育審議会答申。幼稚園,小学校,中学校,高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(1)小・中学校の教育課程の
- 8) 文部科学省(2008)中学校学習指導要領総則解説編。部活動の意義と留意点,84-85。
- 9) 文部科学省(2012)スポーツ基本計画。学校と地域における子どものスポーツ機会の充実,7-12。
- 10) 文部科学省(2015)中央教育審議会(答申)。チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について。iii)部活動に関する専門スタッフ,37-39。
- 11) 中澤篤史(2014)運動部活動の戦後と現在～なぜスポーツは学校教育に結びつけられるのか戦後から現在へ～。第1刷,東京,青弓社,200-271。
- 12) 中澤篤史(2011)学校運動部活動研究の動向・課題・展望スポーツと教育の日本特殊的関係の探求に向けて。一橋大学スポーツ研究,Vol. 30,31-42。
- 13) (公財)日本体育協会(2014)学校運動部活動指導者の実態に関する調査報告書。学校運動部活動指導者の実態,6-9。
- 14) (公財)日本中学校体育連盟(2016)日本中学校体育連盟加盟校・加盟生徒数調査。学校数・加盟校数(男)(女)。
- 15) 西島 央,矢野博之,中澤篤史(2007)中学校部活動の指導・運営に関する教育社会学的研究—東京都・静岡県・新潟県の運動部活動顧問教師への質問紙調査をもとに—。東京大学大学院教育学研究科紀要,Vol. 47,101-130。
- 16) 志賀真珠美,荒井弘和(2013)スペシャルオリンピックスのボランティアコーチの活動に関連する要因。スポーツ産業学研究,Vol. 23, No. 2, 241-247。
- 17) 竹之下休蔵,岸野雄三(1983)近代日本学校体育史。日本図書センター。
- 18) 谷口勇一(2014)部活動と総合型地域スポーツクラブの関係構築動向をめぐる批判的検討～「失敗事例」からみえてきた教員文化の諸相をもとに～。体育学研究, No. 59, 559-576。
- 19) 全日本中学校校長会(2016)全日中教育ビジョン。部活動の充実,16-17。

付表1 生徒の自主性を育成する上で重要視している運動部活動に関する取り組み

上位カテゴリ	下位カテゴリ	実際の回答(対象者)
運動部活動を促進するための仕組み作り	参加意欲を高める工夫	<ul style="list-style-type: none"> • (生徒の技能向上のニーズに応えるため) 外部指導員のいる部は2つですね。(A) • 壮行会や引継ぎ式(3年生から2年生へ世代交代する式) っていうのを行います(生徒が頑張っている姿を保護者にも見てもらいます)。(A) • その(生徒のニーズに応えた部の運営を行う) 傾向の方が多いかと思います。(B) • (生徒がいろんなレベルを目指せるように) 全国を目指す先生がいてもいい。で、(地区大会の) 1回戦突破を目指す先生がいてもいい。(C) • 全国レベルだから、自分ら(生徒)もそういう(部の活動になんとか頑張っについて行く)ものだと思っているのかもしれない。(C) • (部の活動時間を確保するために、1週間に掃除を2回にして) 数少ないんだから、一生懸命掃除をやるように(と指導している)。(C) • (生徒の技能向上のニーズに応えるために) 外部の指導員は合計で3~4名います。(D) • (もっと練習をしたい生徒のために) 練習場所とか、練習時間が限られているので、放課後できない時間を朝練習をやっている部もあります(許可しています)。(D) • (色々な部が) 表彰を受けることがよくあるんですけど、そういった(大きな大会や小さな大会を比較せず全部表彰する)部分は、目に見える形で成果として現れていますし、子どもも意欲がわいてくるって部分では、相乗効果を持っているかなと思うんですけど。(D) • 先生自身の力量がなかったら、(活動場所に行って)一緒に子どもとボールを拾うとか、一緒に参加するというような形はお願いしています。(D) • (試合時アドバイスをもらえるよう) 大学生として、サッカー部が(外部指導員を)登録しています。(E) • そこ(地域の体育館に協力をお願いして)を予約して、子ども達を連れて行くとかですね。(E)
	転部や兼部ができる仕組み	<ul style="list-style-type: none"> • (運動部を退部した生徒は) 文化部に転部して、そこで活動しています。(A) • 途中で転部することができます(システムを構築している)。(B) • (退部した場合は) 他の部活動に入部する子もいます(再チャレンジできるシステムがある)。(C) • 兼部している子もいます(システムを構築している)。(D) • 1年の時には、この部活入ってたんだけど(自分に合わない場合は)、2年になって転部っていう子もいます。(E)
	全員が部活動に参加する雰囲気作り	<ul style="list-style-type: none"> • (先生達の指導してもらっているので、帰宅部の生徒が) 非常に多くなってしまったということはありません。(B) • 大体の子ども達が(部活動)を休まないで来ます。(C) • (楽しい雰囲気づくりを行っている)ので途中退部や休部をする生徒は) あんまりないです。(C) • 中学生にとって、需要(運動部への入部を希望する)層が高い。(D)
	活動目標の明確化	<ul style="list-style-type: none"> • とにかく勝利を目指して、それぞれのレベルに応じた目標を設定している(学校経営計画に位置付けている)。(B) • 1つ1つの部活動で目指すものは微妙に違うし、運動(部)と文化(部)でも違う(目標を生徒達に明確に示すよう指導している)。(C) • (学校としてサポートをしっかり行うので) 先生方がこういうことを通して、子ども達を育てたいんだということを保護者に語れるような思いを持って、取り組んでほしいなどは思っています。(C)
	入部の推奨	<ul style="list-style-type: none"> • 文化部も入れて、全員(部に)入ることになっています(部活動を必修としている)。(A) • どこかの部活動に必ず1つ入るようにと指導している(部活動を必修としている)。(B)

付表1 生徒の自主性を育成する上で重要視している運動部活動に関する取り組み(つづき)

上位カテゴリ	下位カテゴリ	実際の回答(対象者)
社会性の育成	人間関係の構築	<ul style="list-style-type: none"> 仲間意識, 絆ですか. そのところを(朝礼や学校行事, 地域活動等で)強調しているところがございます.(A) 人間関係, 信頼関係, 絆が一番培われるのが, 部活動ではないのかなって気がしています.(A) 特に先輩・後輩っていうのは, 部活動の中ではとても大事なところになっていくと思います.(A) 人間関係, 上下関係, それから自分に厳しく接すること(ができる).(C) (部活動は)1人でやるもんじゃないので, その(集団)中で人間関係を構築するということ.(C) みんなで協力するとか, 時間を守るとか(様々な教育場面を通して指導している).(D) 上下関係をそんなびしっとする訳ではないけれど, それなりの態度で接するように, 先輩やなんかに接するというような, 当たり前のことをきちんとできるように色々な場面(朝礼や保護者会等)で言ったりしています.(D) 横のつながりだけでなく, 子ども達にしてみれば, 縦のつながりがある.(E) 先輩は後輩をしっかり指導したり, 見守ったり, 後輩は先輩を立てたりとか, 自分から率先して動くとか, なかなか普段では出来ないことを学んだり(実体験することができる).(E) 技術だけでなく, そういう付随したもの(先輩・後輩のつながり)がとても大きいかなと思います.(E)
	人間としての成長	<ul style="list-style-type: none"> 人格形成っていう大事なところがあります.(A) 自分を育てようとか, そういうところは大事にしていってほしいなとは思っています.(C) 自分の能力を向上させようとか, 真剣に取り組む姿勢だとか, そういうものを大事にしてほしい.(C) 好きなことだからこそ, 苦勞もあえてしていってほしい.(C) 辛さを乗り越えるとか, そういう精神面で成長してほしい.(C) 今の子ども達に望みたいのは, 自分に厳しく接すること, 限界に挑戦するとか, 辛さを乗り越えるとか, そういう精神面で成長してほしい.(C) 技術よりか, 勝つっていうよりか, やっぱり, 部活の中で自分を磨くとか, 人間関係を磨くとか, ということの方が大事(様々な教育場面で指導している).(D)
	マナーやルールの順守	<ul style="list-style-type: none"> マナーですか. あと, 礼儀, 挨拶, そういうところは, この部活動で培ってもらいたいなあと思っている.(A) それ(礼儀作法)ができることが, 部活動の中では一番大切なのかなと思っています.(A) マナーは大事にしていってほしいなとは思っています.(C) ルールっていうんですかね, 約束事, 時間を守るとか(様々な教育場面で指導している).(D) 色々マナーにしても, 部活で担ってもらっているところって, 大きいと思うんです.(E)
	挨拶の推奨	<ul style="list-style-type: none"> 「お願いします」「ありがとうございました」って言う声が, 私は一番好きな方なので, 常に子ども達には(挨拶が部活動の中で最も大切と様々な場面で)言わせてもらっています.(A) 部活に入っている子は, 結構挨拶(部活動をよく見に行くと)なんかも良くなります.(D) 生徒指導の一環として, (挨拶する習慣を身につけることを)部活で担ってもらっているところって, 大きいと思うんです.(E) 歩きながら挨拶しちゃだめだって(生徒に)指導しているんですよ.(E)

注:「実際の回答」の文中に記載されている()は, 文脈を考慮して対象者の意図を補った部分である。

付表2 行政施策の達成を図る上で重要視している運動部活動に関する取り組み

上位カテゴリ	下位カテゴリ	実際の回答(対象者)
協働するための 仕組み作り	地域との交流	<ul style="list-style-type: none"> • 学校説明会の時に、(小学生が中学校の運動部活動に参加する体験の機会を用意して)体験的に行う。(B) • 陸上競技部(代表4名のみ)が隣の小学校に行って、運動会のデモンストレーションとして、見本のレースを見せるとか、そういうことはやっています。(B) • 地域のスポーツ教室などがある時に、(全部の部活動が参加するのは無理があるので)部単位で参加するというはあります。(D) • (地域の)餅つき大会とかで、(参加可能な)部ごとでまとまってお手伝いに行ったりとかしていますね。(E) • うちの校庭で小学生同士の(サッカーの)試合を中学生は手伝い、審判、合同練習、中学生が小学生を見て上げる。(E)
	教育委員会の支 援の活用	<ul style="list-style-type: none"> • (校長会として予算要求しているので)教育委員会は外部指導員、外部支援をお金の面でサポートしてくれています。(D) • 地域指導員にお支払する手当は(教育)委員会の方でしてくれています。(E) • 部活動の運営に関しての(校長会として安全面や指導法の開講を希望しているので)講習会、そういうのやってくれたりしています。(E)
	地域のスポーツ クラブの把握	<ul style="list-style-type: none"> • ○○市全体にサッカークラブがあって、市が社教(社会教育団体)でやっているチームでしょうか(運動部の数が多いのでどこかで練習する場所はないかと)。(B) • (中学校の部活動をより盛んにするために小学校在籍時から連携するため)近隣の小学校のチームとか、地域の野球チーム、サッカーとかあります。(E)
	保護者や地域と の連携	<ul style="list-style-type: none"> • そこのところ(部活動に関わる様々な問題の解決)、地域との間に入って、保護者の間に入ったりとか、そういうこと(学校と保護者や地域との関係づくり)をしてほしいと聞かされた。(C)
	地元への帰属意 識を高める工夫	<ul style="list-style-type: none"> • 学校(の教員や生徒に対して)で地元の学校という意識(啓発)を高めることは、やっていかないといけないかなと思います。(E)

注:「実際の回答」の文中に記載されている()は、文脈を考慮して対象者の意図を補った部分である。

付表3 教員の負担軽減を図る上で重要視している運動部活動に関する取り組み

上位カテゴリ	下位カテゴリ	実際の回答(対象者)
顧問のモチベーションを維持・向上させるための工夫	教員の希望した部への人員配置	<ul style="list-style-type: none"> ・(教員の)希望をしているところ(部)を第一優先で(教員の希望する部活動のみ開設している)。(A) ・先生方の希望のところ(部)に入るのは、8割以上だったんです。(A) ・2~3の部活が調整が必要になってきますが、あとは、基本的には、先生方のご希望の部活動には7割くらいですか。(B) ・やりたい人(担当する部を希望する教員)が皆(ほとんどの部へ)入っている感じですよ。(D)
	教員の経験と担当種目の一致を目指した人員配置	<ul style="list-style-type: none"> ・(専門種目と担当している部の種目が)マッチングしている先生はいます。(A) ・専門とする競技種目と指導している部活動とは一致している。(C) ・教員が専門とする競技種目と指導している部活動とは一致している。(D)
	顧問の活動方針の尊重	<ul style="list-style-type: none"> ・顧問の考えで任せている部分に関しては、間違っていない限り、任せていきたいと思っている(間違っている場合はきちんと指導している)。(C)
顧問への配慮	教員の負担の認識	<ul style="list-style-type: none"> ・かなりの先生方の(交通費の)持ち出しっていうのも気になっています(全国大会の交通費は、教員1名分のみしか支出されない)。(C) ・子どもや親のプレッシャーがすごいです(校長のところにも苦情がある)。(D) ・その辺(外部指導員と顧問との連携)が上手くやればいいんですけど、なかなか難しい(校長が調整に入らないと解決しない場合もある)。(D) ・そういう(生徒が目の前にいると、どうしても時間を割いてあげたくなる)犠牲的な精神の上で、部活がようやく成立して、それが学校の運営でも、生徒指導とか、主体的な行動、それから、問題解決みたいな、そういうような力を育成する土台になっている(学校が荒れている時代は部活動で生徒のエネルギーを発散させていた時代があった)。(E) ・これで(土日もなく、生徒達や地域に貢献しているにも関わらず)、保護者からクレーム来ちゃうと、可哀想だなと思っちゃうんですね、一生懸命やっているのに。(E)
	顧問の抱える課題の認識	<ul style="list-style-type: none"> ・もう少し(顧問に対する)財政的な(遠征費の)支援があってもいいんじゃないかって。(C) ・その辺のところ(採用がなく、教員の高齢化が進むこと)は、また今の若い連中(教員)にも同じこと(一向に部活動に関する負担が軽減されないこと)が待っているのかなと心配しています。(C)
支援者の確保	全員顧問制及び複数顧問制	<ul style="list-style-type: none"> ・部活を持っている先生は、我々(管理職)を除いた全員です。(A) ・(ある部は)2人(体育主任と一般教員)で持っています。(A) ・全員の先生が部活を持っている。(B) ・運動部活動に2人ついてもらうサポートの体制はできています。(B) ・全員が顧問になる体制ができています。(C) ・複数顧問制で2名、最低2名はっていう。(C) ・運動部だけは、やっぱり複数でない。(D) ・全員、部活顧問制です。(E) ・(複数顧問でない部は)ないですね、みんな複数制です。(E)
	保護者との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・和洋折衷ではないですけど、保護者の考えも聞きながら、学校の運営もこういったこと(部の運営に関する具体的な方向性)っていう(協力依頼をしている)。(A) ・そういうもの(校長が顧問の指導方法に対して改善を求める点)に関しては、(保護者へ)申し訳ありませんでしたと対応します(謝罪をしながらも、良き部稼働への協力者となってくれるよう働きかける)。(C) ・そこ(遠征に行った時の帰宅時間、教員の自己判断で行うこと)は、保護者の理解の下でやってくださいと(顧問に指導している)。(C) ・公立の中学校だし、(部活動の運営方針に関しては、保護者の要望通りに)できるものとできないものがあるんですからと、ご理解いただくようにするのは(说得するのは)大変でした。(D) ・そこ(小学校の生活と比べて、練習時間が長く、帰宅時間も遅くなり、家でぐったりしてしまうこと)は重々(保護者会や部活動説明会等で)説明しなければいけないかと思います。(E) ・(教員の負担を少しでも減らすために)保護者会の部費の徴収とか、顧問がやらないで、管理をしてもらって、PTAからも前期・後期で部の活動費を援助してもらっています。(E)

注:「実際の回答」の文中に記載されている()は、文脈を考慮して対象者の意図を補った部分である。